

カイツブリ 英: Little Grebe 学: *Tachybaptus ruficollis*

1. 名前

英名はLittle GrebeまたはDabchickが使われ、古くはDive-dapperという名前も使われた。(Like a dive-dapper peering through a wave/ Who, being looked on, ducks as quickly in. シェークスピア「ヴィーナスとアドニス」より). 学名の属名 *Tachybaptus* はギリシア語で「速い」の takhus と「下に潜る」の bantos に由来する. 一方 *ruficollis* はラテン語で「赤い」の rufus, 「首」を意味する collis からくる.

2. 分類と形態

分類: カイツブリ目 カイツブリ科

全長: 26-33mm 自然翼長: 91-105mm

嘴峰長: 20.6 ± SD 1.5mm (N=38)

ふ蹠長: 35.6 ± SD 1.7mm (N=9)

体重: 160-214g

※筆者らによる雌雄混合の計測値. 実際にはオスがメスよりも少し大きい.



図1. カイツブリの足指

形態は水中で遊泳するのに適応しており, 足の付く位置が体の後ろに偏り, 足指にはヒレ状の水かきが発達する(図1). ヨーロッパの亜種では目の虹彩が暗赤色であるのに対して, *poggei* では黄色である.

羽色: 雌雄同色で, 夏羽は頭が黒褐色で首が赤褐色. 冬には概して淡色になる(図4). 眼の前のクリーム色が特徴. ヒナは独特の縞模様がある(図2).



図2. ヒナを連れたカイツブリ.
[Photo by 足立友克]

鳴き声: 短い鳴き声も出すが, 特徴的なのはケレケレレ...と甲高い鳴き声である.

3. 分布と生息環境

分布: カイツブリはアジア, ヨーロッパ, アフリカの旧大陸に広く分布する. 北海道から沖縄にかけて生息する亜種 *T. r. poggei* は, 日本の他, 中国大陸, 朝鮮半島, 台湾, 千島列島にも分布する.

生息環境: 河川の下流域, 特に湖沼に生息する. とりわけ抽水植物や浮葉植物が繁茂する湖沼や溜池に多い.

4. 生活史

繁殖システム:

オスメスが巣作りからヒナの給餌までを共同で行う. しかし, 筆者らの観察では, 育雛期間の間に親の一方が姿を消し, 残された親だけが最後までヒナに給餌することもしばしばあるようだ. 孵化後のヒナは親鳥の背中に乗ったり翼の下に隠れたりする.

巣: 巣は古来「にお(カイツブリの古名)の浮き巣」と呼ばれてきた. 浮葉植物や抽水植物の中で, 植物を集めて浮き巣を作る(図3). 水上に浮き出ている下には大きな基部があり, 基部では直径50から最大60cmにまで達する.

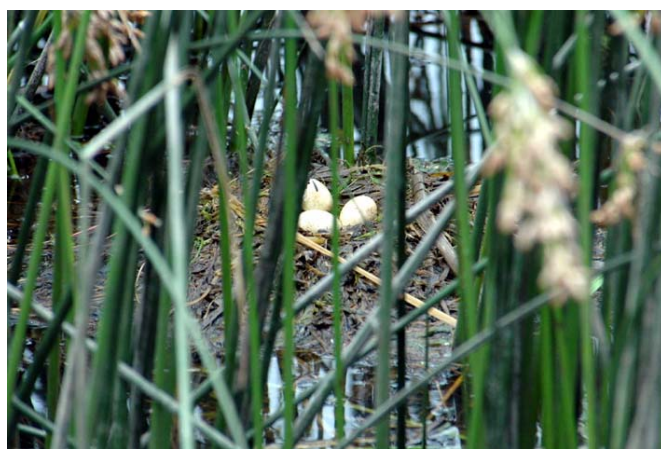


図3. カイツブリの浮き巣と卵. [Photo by 足立友克]

卵: 一腹卵数は3~6個で, 大きさは38×26mm程度. 産んだ当初は白いが次第に黄色く汚れる.

抱卵・育雛期間:

抱卵は両性によって行われ, 抱卵期間は第1卵または第2卵産卵から始まる. 抱卵日数は21~24日にわたり, 平均は22.6日である(渡辺 1993). 産卵と同様, 孵化も数日かけて行われる.

年に複数回繁殖する. 2回が多いが, 北方の生息地では1回のみが多いようだ.

渡り: 目覚しい渡りはしないが, 北方で繁殖する個体の多くは結氷を避けて南方へ移動する.

5. その他, 食性

ヨーロッパに生息する亜種では, むしろ主食は水生昆虫だと紹介されることが多い. 日本の亜種では小型魚類のほか, 昆虫やエビなども食べており, 様々である(長谷川 1981, 渡辺 1993). ときに水面上や, 稀には空中のエサをとることもあるが, 潜水して採餌するのが普通である. 透明度の高い池では, 水面に浮かびながら頭部だけを水中に漬け, 水面下の様子を探る行動も見られる. なお, 東京都井の頭公園の池にすむカイツブリは, 人がコイに与えたパンを食べることがある.

生態図鑑

6. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

●移動

飛ぶのが苦手な鳥ではあるが, 前述のように冬期の前に移動を行うばかりでなく, 特に繁殖期のはじめ頃には池から池へ, 頻繁に居場所を変えているようだ. 春先に池の結氷が解けると, また, 秋に水抜きされた水田に導水のために水が溜められると, めざとくカイツブリがやってくる. しかも, ある池にしばらく居たかと思うと姿を消すことがしばしばある. 理由は不明だが, ある池でいったん繁殖を始めると, ヒナが独り立ちするまではここで給餌しつづけるしかないカイツブリにとっては, どの池で繁殖するかを決定することはきわめて重要な問題だろう. エサの組成や密度などは溜池ごとに異なっている. 従って, 池ごとのエサ条件を見極めるためのサンプリング行動(これに加えてカイツブリ個体間の干渉もあるだろう)ではないかと筆者は考えている.

●減少の問題

本種は近年減少傾向が著しい(須川 2001, 嶋田ほか 2005). 環境庁自然保護局生物多様性センター(1999)によれば, 1978年から1998年の20年間に繁殖記録が大きく減少している. 原因としては, 繁殖に必要な水草帯の消失や溜池の減少もあるが, 魚食性の外来魚オオクチバスの蔓延によって, 主要なエサである小型の魚が激減していることが指摘されている. もちろん, バス自身も魚である. 池にはバスの大きな個体ばかりでなく, バスの稚魚だっているだろうと思われるかもしれない. しかし, バスは非常に成長の早い魚であり, その年生まれのバスは, 秋にはもはやカイツブリの捕食可能なサイズを超えてしまっている. カイツブリがバスを食べて生活することはできないのである.

●カイツブリと魚類の関係

まだ学会発表の段階だが, 小型魚類とりわけ紡錘型の体型をもつモツゴなどがカイツブリのエサ環境に重要であることを野外調査と室内実験の双方から調べている. オオクチバス(通称ブラックバス)の移入は小型魚類を減少・絶滅に追い込み, カイツブリなど小型の魚食性鳥類のエサ環境を悪化させる. 一方, たとえ密放流されてもバスが増えることができず, 小型魚類の豊富な池もあるが, それはどのような条件を備えている場合か, 追究の課題である.

●カイツブリと私

以前に, 青森県内でモツゴ(小型の淡水魚)の生息状況を調べていたところ, 「この池にはカイツブリがいるから多分モツゴがいるよ」と経験的に学生たちと話し合っていました. その後, カイツブリの全国的な減少の一因としてオオクチバスの生息域拡大が指摘されていることを知り, 魚と鳥の関係を明らかにする実際例として扱うようになりました.

カイツブリは見ていて飽きない鳥です. 3年前には, 孵化後の早い段階で連れ合いに去られたカイツブリの必死の

給餌活動を, 終日見ていました. ひたすら潜っては魚(ほぼ全てモツゴです)を捕ってヒナに与える姿には涙ぐましいものがありました. ひとしきり活動したのち, とうとう眼をつぶって居眠りを始めた

(周囲でヒナたちは騒いでましたが)ときは, 「お母さん(お父さんだったかも), お疲れなんだ!」といたく同情してしまいました. ちなみに, カイツブリのヒナは, 体サイズの割に声が非常に大きく, 騒々しいくらいです. 一日じゅう, ヒナたちの「エサよこせ」を聞かされている親も大変ですね.

潜水上手のカイツブリは, その一方, 飛ぶことは下手です. 波を蹴立てて水面を「飛ぶ」姿をよく見かけますが, これはむしろ「走っている」感じです. にも関わらず, 池から池へ, 意外にしばしば移動していることは間違いありませんし, 結氷を避けて季節移動も行っているのも確かです. 「大空を翔けるカイツブリ」, 見たいものです.



図4. 雪の中のカイツブリ(冬羽個体).
[Photo by 石田忠義]

7. 引用文献

生態についての詳しい研究報告:

長谷川博. 1981. 深泥池のカイツブリの採食活動—1978年夏の状況—. 深泥池学術調査報告書 pp. 283—290. 京都市文化観光局.

渡辺央. 1993. カイツブリの繁殖生態. 長岡市立科学博物館研究報告 28: 73-90.

個体数の減少に関する文献:

須川恒. 2001. 琵琶湖のカワウ問題から見えること. 野鳥 647: 7-9.

嶋田哲郎・進東健太郎・高橋清孝・Aaron Bowman. 2005. オオクチバス急増にともなう魚類群集の変化が水鳥群集に与えた影響. Strix 23: 39-50.

執筆者

佐原雄二 弘前大学農学生命科学部教授

魚の生態・行動と, その捕食者となる鳥の生態・行動を研究している. もっとも好きな鳥はアオサギである. アオサギをはじめサギ類の雑学, とくに文学に登場するサギについても関心を持つ. 主要著書: 「さかなの食事」(岩波書店 1979年), 「魚の採餌行動」(東京大学出版会 1987年), 「メダカとヨシ」(共著 岩波書店 2003年), 「フィールドワークは楽しい」(共著 岩波書店 2004年)

